

## 「やまがた観光まちづくり塾」 in置賜 概要 11/12(日)

### 【まちあるき】

#### 「小松織物工房(白鷹町)」

- ・山形セレクションに選ばれた織物。1反で98万円(税別)する。  
これに、プラス15万円~20万円で仕立てとなる。
- ・この地域織物業者は4軒から2軒に減った。良い物でも販売に結びつかないと商売にならない。
- ・ここでは、年間、織締めを150反製作している。
- ・課題は、後継者がでてこないことである。
- ・ここに直接訪ねてこられ、注文があった場合は直接で売ることもしている。しかし、2~3ヶ月かかるので、待つ必要がある。
- ・白鷹町内の養蚕農家は15軒。県全体の生産量の内、60%~70%を占める。

#### 「滝野交流館(白鷹町)」

- ・明治8年から124年間開校していた。
- ・若い衆は取り壊して新しい公民館を建てたいと言っていたが、何年もかかり説得し、学校の雰囲気崩さぬように改築した。全て地元木材を使用。
- ・芸工大生に1室を貸している。5,000円/年

#### 紅花を咲かせる会 今野氏

- ・べにばな国体の前年、サラリーマンを辞め白鷹に戻ってきた。37歳のとき。べにばな国体という開催するが、紅花はどこにも咲いていない状況であった。
- ・国体選手を民泊させたが、選手から紅花はどこに咲いているの?と質問が多かった。咲いているところはほとんどなかった。こういったことから、平成6年、有志8人で咲かせる会を結成した。
- ・紅花は99%が黄色の色素で、残り1%が赤の色素。
- ・天然のもので赤の色素を取り出すことができるのは、紅花のみ。
- ・紅餅は33,000円/キ。1枚作るのに、花350~500本を使い、最終的には2.5グラムになる。  
10aで7キ。山形では50キしかとれない。
- ・もっとたくさんの人に作ってほしい。

## 【白鷹町の観光について】

説明者：白鷹町観光協会事務局長 馬場 誠

場所：「南陽市民会館」

参加者：50名

- ・昭和60年「やな場」が完成した。その後、拠点整備として、「あゆ茶屋」、「パレス松風」、「のどか村」を整備した。
- ・拠点の点在化、分散化されたものをどう活かすかが課題であった。
- ・地域に住む人の共通する心の琴線に働きかける企てが大切である。
- ・「白鷹にあってよそにない、白鷹ならではの、いろいろあるがいったいない」をテーマにまちづくりを検討した。
- ・平成4年、町内に桜の古木7本があるのに気づいた。
- ・この桜を守っていくため、アスファルト道路を剥がし、桜のための「道譲り」を行った。
- ・ここから桜回廊がスタートした。
- ・春サクラ、夏はベニバナ、秋はアユ、冬は隠れ蕎麦屋のしらたか  
ポスターでは、現場の顔を載せた。
- ・弱点、コンプレックスが“ならでは”である。
- ・生きざまが大事で、さらに本物でなければ駄目である。
- ・町民に参加してもらい、外から応援をもらう仕組みづくりを行ってきた。何より、やっている人が楽しくなければ続かない。

## 【レクチャー】

講師：小川原 格 氏 株式会社 藪半 代表取締役、国土交通省 観光カリスマ

場所：「南陽市民会館」

参加者：50名

テーマ：「知恵を活かしたまちづくりと官民協働の情報発信」

「小樽観光の現状」

平成11年、972万人だった年間の来訪者が毎年、50万人ずつ減少し、平成17年度は756万人となった。平成16年度が754万人であったため、行政は客離れが下げ止まったと見ている。このことはあぶない状況である。

観光総消費額は小樽市の産出額の15.4%、経済波及による売上高は産出額の31.2%、観光経済波及効果による雇用は事業所従業員の30.4%を占め、小樽は物流港湾から観光へと流れを変えていった。

これまでのながれ

「市民のまちづくりへの無感動」

昭和41年。札幌バイパス延長を延長し、運河を埋め立てた跡に道道港湾線を建設することが小樽市

の都市計画で決定された。

行政は6車線道路を作ろうとし、90棟ほどあった有幌石造倉庫群がほぼ壊されてしまい、それは小樽のベースが壊されたことを意味した。

市民はこのときはじめて街に与える影響を知ることとなった。

#### 「市民の発想」

運河は自然の下水処理場という状況で、ヘドロがたまり、メタンガスが発生し、悪臭を放っていた。マイナス資産となりつつあったが、運河という歴史的資産を「売り」の材料とし、小樽の街そのものをブランド化しようという動きがおこった。

マイナスになっていたものをプラスに変え、運河周辺の再活用から観光を切り口にしたまちづくりを行っていくこととなる。

#### 「小樽運河からのまちづくり」

昭和48年頃から運河論争がはじまり、小樽運河を守る会の会員は当初2,400人いたが、会員同士の対立等徐々に人数は減っていき、気がついたときにはたった15人位にまで減少していた。（昭和51年頃）

しかしその頃JターンやUターンで小樽に帰ってきた若者によるポートフェスティバル（運河周辺の石造倉庫群等を使つてのフリーマーケット等）が開催され、2日間で30万人のお客様が来場するイベントとなった。そのことで運河周辺の環境の再評価が促進された。

また、ウォーターフロント開発があり、廃墟同然であった港湾周辺地区が魅力ある観光地として再生した。商工会議所の首脳陣が運河埋め立てから保存へと考えを転換し、10万人の保存署名もあり、運河は保存されることとなった。約10年以上続いた運河論争は終焉をむかえた。

その間運河の一部は埋め立てられ道路となった部分もある。

市民ボランティアによる花壇整備や、大人のイベントとして、北の「ウォール街」と呼ばれた銀行街を通行止めし、ジャズフェスティバルを開催するなど、市民を中心にした活動が盛んになっていく。

#### 「運河保存波及の結果」

昭和58年には、地元経済人による石造倉庫再活用事例である「北一硝子3号館」が完成し、来客数は年間200万人以上となっている。

また、小樽オルゴール堂も北海道有数の精米会社の社屋と倉庫をオルゴール販売店に再利用した。1912年に設計されたイタリアルネサンス様式の旧北海道銀行本店も現在は「ワインレストラン・小樽バイン」として再利用され、繁盛している。

#### 「運河論争の残したもの」

10年を超える運河論争は、広く国民の注目を浴びたこともあり、小樽の認知度をアップさせること

となった。

石造倉庫の破壊等、歴史的資産に対する市民の価値観が醸成され、まちづくりに対する市民意識が高まりを見せることとなった。

その結果、昭和58年「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」が制定され、平成4年には「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」が制定、そして平成17年には小樽運河周辺が「特別景観形成地区」に制定されることとなった。

ここまでくるには、市民の力は欠くことのできないものであった。

#### 「おもてなし」

北杜夫が「小樽の寿司屋はボッタクリだ」と言ったことにより、大きな社会問題となった。

そのことから、平成5年おもてなし推進協議会が創設され、平成7年に小樽観光誘致促進協議会が創設されることとなる。そしてそれは、官民協働の観光地づくりへと姿をかえていくこととなった。

「小樽観光を考える」という観光促進パンフレットを作成し、市内全観光施設・飲食施設へ配付を行った。観光に対する共通認識を持つことにつながり、課題の共有化、果ては小樽観光のバイブルとまでなった。

#### 「冬の魅力づくり」

小樽雪あかりの路を平成11年から毎年開催し、10日間の期間中、約50万人を超える来客がある。

この事業をスタートするにあたって、まず、小樽のマイナスをピックアップした。そしてマイナスをプラスにするという発想のもとで取り組んだ。

キャンドルは総数15万本を使用するが、企業にスポンサーになってもらいキャンドルの提供をいただくなど、予算削減にも努めており、事業総予算は2,400万円で行っている。

また、特に重要なのが、ボランティアの存在で、実行委員スタッフは100名強であるが、ボランティアはなんと1,600名(延べ)を数える。その中には海外のボランティアも存在し、約60名の協力をいただいている。(韓国50、豪州8)

このイベントには地元小樽市民もたくさん来てくれ、楽しんでいただいている。

また、「第10回ふるさとイベント大賞」も受賞している。

以前はヘドロがたまり悪臭を放っていた小樽運河、さらに冬は寒く暗いイメージがつきまとう北国というマイナス面をプラスにしているのが小樽観光である。

観光とは、マイナスのものをいかにプラスにすることができるか、そして他に自慢できる心地よいまち(地元の住民が住んで良いと感じることができる)にしていくかということ。

そのようなまちに自然と人は集まり、輪(仲間)ができる。

観光集客施設に人は来ない。人が集まっているところに人は来るのである。

【ディスカッション・交流会】

場所：いきかえりの宿「瀧波」

参加者：43名

< 良い点・悪い点 >

置賜総合支庁 商工労働観光課 鈴木和他課長

良 = 今回の塾は、県内各地よりいろんな人が参加して開催されたことが良かった。

悪 = 寒かった。

置賜総合支庁 商工労働観光課 早川昭博主査

良 = 白鷹町の4シーズンのポスターが良かった。こだわりをもって作っている。

悪 = 各施設への案内看板が少なかった。もっと丁寧に案内すべき。

置賜総合支庁 商工労働観光課 遠藤信博主査

良 = 滝野交流館、旧滝野小学校の雰囲気が大変良かった。

悪 = 白鷹町内や高畠・南陽間の移動時間が長かった。

高畠

観光は人づくりだと思う。住民には2種類あって、ただ住んでいる人と、魅力を感じて住んでいる人がいる。小さな力も集まり団結すれば、大きな力となる。

清酒東光 小嶋総本店 小嶋喜市郎社長

良 = それぞれの季節が美しい。

悪 = 古いまちなのに古いものを大事にしない。古いものを安易に壊してしまうこと。

よねおりかんこうセンター 伊藤 香

熊野大社の3日間のツアー客が1,000人を超えた。

山形駅副駅長 佐々木和夫

良 = 本物を見せてもらった。自信を持って進めてほしい。

悪 = 地域の皆さんが一体となってまちづくりや観光に取り組んでいるのか？心配される。

置賜総合支庁企画振興課 須藤 英克

良 = 馬場さんがいること。

悪 = 高畠の「昭和縁結び通り」は若い年代から見ても、古すぎて良さが理解できない。

兎玉

悪 = 知らないものが多くて理解できない。知らない人に語ってくれる人がほしい。また、映画を見たことがないので共感できない。

長井村塾 横山直幸

良 = 長井市の良いところは意欲のある若い人が多いこと。

悪 = 高畠町では、若い人が見受けられなかったが、若い力はあるのか。

(株)読売旅行山形営業所長 野村浩志

良 = 昭和レトロは個人的には好き。また、クラシックカーが好き。

山形鉄道(株) 朝倉達夫

良 = フラワー長井線の悪口を言われて、いつか見返してやると思った。そのための車掌がガイドをする全国でも珍しい試みをしている。さらに方言ですることにより、オンリーワンとして行なっている。

悪 = フラワー長井線の座席が対面なので、外風景がたのしめない。

鉄橋を通るときは徐行や停車するなど、風景を楽しむ方法を検討してみたい。

ステップアップコミュニケーション代表 高橋 直記

良 = 白鷹は地域の愛情を感じている。

悪 = 桜や伝統文化など過去を大切にしているのは良かったが、ゼロから1を作ってほしい。

飯豊町観光協会事務局 二瓶裕基

良 = ボランティアガイドや店主の協力体制がよかった。

悪 = 案内サインが親切じゃないと感じた。

わからない時は人に聞けば良い。市民の対応能力を高めていけば良い。

小川原講師

案内サインは、これ以上必要ないと感じる。サインの多いことがサービスだとは思わない。景観の美化を進めるほうが良いのではないか。

長井市観光協会 今野誠

良 = 白鷹の4シーズンという軸がしっかりしているのはすごい。

長井市商工観光課 丸山邦昭

悪 = 薬師桜の整備は、道路のすぐ側で環境的によくない。

釜の越桜の看板が正面にあって邪魔。

滝野小学校の正面に新しい住宅があり、景観が良くない。

置賜総合支庁 商工労働観光課 相澤薫

良 = 小松織物の旦那さんの笑顔が印象的。これをどうやってまちづくりに生かせるか、「いい人がいる」だけでなく、つなげていくことを考えなくてはならない。

悪 = 若い人が少ない。女性も少ない。

仙台 小田島

良 = 景観が良い。紅葉、柿の木など童謡の世界を感じさせる。人が生き生きしている。

悪 = フラワー長井線を利用してもらっても、その後の交通手段がない。拒絶感がある。車を運転しない人は不安を感じる。ゆっくり散策するルートなど必要。

< 2次交通について >

置賜総合支庁 商工労働観光課 鈴木和他課長

駅からは、基本的に歩きで田園風景を楽しんでほしい。その中で地域の人とのふれあいを通して旅を楽しむ。

(株)読売旅行山形営業所長 野村浩志

自転車を電車に乗せられないか。

山形県副知事 後藤靖子

歩くことでまちの表情は見えるので、歩けるまちづくりは大切。しかし、「歩く人だけでよい」だから「何kmでも歩け」というのは閉鎖的。歩ける環境づくり、あるいはレンタサイクルシステムなどの工夫が必要。

山形駅副駅長 佐々木和夫

駅から、歩くにしても自転車にしても、駅から何分というマップが必要。

白鷹町観光協会 馬場誠

レンタサイクル、山形鉄道におりたたみ自転車を乗せる (rail & cycle) などいろいろ試してみてもどうか。

最上町交流促進課 後藤昌広

良 = 金田氏の説明や、フラワー長井線の朝倉車掌の意気込みが良かった。

悪 = どりいむ農園直売所の商品ラベルに「その他野菜」と書いてあった。この商品は何？

また、量が書いていない物もあった。

赤倉温泉 平社裕一

悪 = あゆ茶屋は川を売りにしているのに、なぜ川に背を向けているのか。裏にしてはいけない。

赤倉温泉 押切真理子

良 = 紅花の話がよかった。

悪 = 案内板が不親切。

まちづくりびと「三餘の会」 村山智昭

良 = 蕎麦をこよなく愛しているのがわかった。(そばの味が分かった！)

自分の住んでいる県のことをもっと勉強しなければならないと気づいた。特に観光分野は、外貨獲得ということで、外部には情報発信しているが、町内や県内には手薄だと感じた。

悪 = フLOWER長井線は、これから魅力付けなど色々考えていかななくてはならないと感じた。

まちづくりびと「三餘の会」 本間貢

良 = 念願の「あゆ茶屋」に来られたことがよかった。今度は鮎の塩焼きを食べてみたい。

悪 = 土蔵に興味があったが、朽ちているところが多く、世代が変われば取り壊されるだろうなというところが多かった。貴重な資源であるので、残していけるような手立てはないものか。

まちづくりびと「三餘の会」 酒井賀世

良 = 町内全域で四季毎のテーマ性を持って観光しているのがよかった。また、そういう素材を発見

したのがすごい。

悪 = 高畠町のふれあい広場までの道がわからなかった。地元の人に聞いてもわからない。

まちづくりびと「三餘の会」 尾形

良 = 1,000年桜があることがうらやましい。この二世木は積極的に活用していくべき。親子の桜で交流するのもよいのではないか。紅花も「白鷹紅花」ということで広められないか。

悪 = ヤナ公園、あゆ茶屋は、白鷹町の観光の拠点なのか。町の観光案内のようなものがない。

白兔駅にスウィングガールズの写真とか資料がほしい。

YKK AP(株) 齊藤秀樹

良 = 蕎麦が大変よかった。熱意のこもった説明も良かった。

悪 = 紅花は需要と供給のバランスが悪い。量を出せないのか。

うるし工房 銀壽 山岸厚夫

良 = 1000年級の桜が見られてよかった。観光のプロセス(馬場さんの存在)が良い。

悪 = ただ、これからの方向性が見えてこない。保存していくだけ？

川口塾長 馬場さんの縁結びのうまさはすばらしい。

(株)オーヌマホテル 児玉千賀子

良 = 高畠町の商店街が駐車場を無料にしていた。

悪 = 山形市では、有料駐車場の無料化を検討しているが、どうしても有料駐車場を専業として営業している人がいるので、解決しない。どうすれば、解決できるか知恵を貸してほしい。

ゆきしろ 月山志津温泉 志田昭宏

良 = 天然記念物・伝統工芸と詳しく見せてもらった。

悪 = 説明者が高齢の方ばかりだったが、若い人がどんどん出てきてほしかった。

酒田まちづくり開発 西村修

良 = フットパスが印象に残った。歩いてみたいなと感じた。

悪 = 隠れ蕎麦であればのぼり旗はいらないのでは？

極楽鳥海人 加賀谷聡一

悪 = あゆ茶屋の鮎は、天然のものにこだわってほしい。本物は違う。

(社)米沢青年会議所 片山朋彰

良 = 蕎麦が大変おいしかった。

悪 = 山や川などきれいなポイントがあるのに、ビューポイントはここだとわかるような看板がない。案内・設置してはどうか。

山形鉄道(株) 朝倉達夫

白兔駅の由来 = 白兔駅という名前は、地区名であるが、その昔この地域を通った修験者が道の側に仏像を見つけ、葉山に祀ろうとした。しかし、途中道に迷い進めなくなっていた。そこに兎が現れ、葉山まで道案内をしたという伝説がある。月山では「兎」は神の



使いだとされている。

白鷹町商工会青年部 鈴木広貴

良 = それぞれがんばっている現場見られて良かった。

白鷹町商工会青年部 清野隆博

良 = 4シーズンといっても、それぞれの素材の時期は1週間程度であり、その他の時間をどうつなげられるかで、本当の4シーズン観光が完成すると思う。

民と官とやるべきこと、できることが違うので、それを明確にして、確実に実践すること。

川口塾長

小樽の雪あかりの路は、たった10日間だが、小樽の冬のイメージをしっかりと作りあげた。

小川原講師

良 = 白鷹は深い。人のネットワークが活着している町と感じる。

4シーズン観光も、最も適した時期は1週間程度でも組み合わせでは良い武器になる。

悪 = 情報発信が不足というか下手なのかもしれない。塾生の生の観光情報発信が大切。発信したいという思いこそ重要。サインについては、デジタルのものと情報発信の組み合わせの中で考えるべき。行政も考える必要がある。総合的な案内看板は必ず必要。

住んでる地域の人が、近くにいる人のことを認めることが大切である。一般的な傾向として、住んでいる人が隣の人を認めない。

身近な人をしっかり見ること。知れば知るほど発信したくなる。

本物のけじめをつけていく。

川口塾長

語れる人がいるというのは素晴らしいこと。(人の重要さ)

青森県の大間市には「伝説の漁師」がいて、その人に会うために訪れる人がいるほどであるが、これは大間の島康子さんが独自に勝手に「伝説の一本釣り師」と発信したことが全国的に広がったものだ。

後藤副知事

悪 = そばはおいしいかもしれないが、寒い時に冷たいおそばしか選択肢がないのはつらい。

他の地区で、紅花のハンカチ染めをしたが、輪ゴムでしばって液に浸すだけだった。これは本物じゃないし、面白くもない。

良 = おだやかな風景の中に素晴らしい人(本物)がいる。我慢しながら、本物を作っていく、伝えていくことが重要である。

ただ、注意すべきは「地域のものとつなげる」といった場合、安易なやり方で対応しようと見受けられることがある。他の地区で紅花のハンカチ染めをしたが、輪ゴムでしばって液に浸すだけだった。これは本物の紅花が持っている「自然界で唯一存在する赤」というすばらしさが全く伝わってこない。本物をきちんとつなげていくことを考える必要がある。

#### 川口塾長

人と人がつながっていくことは大切なことである。縁に対して貪欲になること、すぐに飛びつくこと、なんにでものっけるノリも重要である。

#### その他

ディスカッションの中で、加賀谷氏から「やまがた観光まちづくり論（仮名）」なる冊子を作成する旨報告があり、川口塾長から、「活動状況を外に発信することは大変重要なことであるので、是非発刊していただきたい」との後押しがあった。